

ギリシア神話原語ワーク

素案 1:ホメーロス、『オデュッセイア』, 22 卷 83-84 行

2018 年 9 月 30 日

1 はじめに

ギリシア神話原語ワークは、古典ギリシア語を学ぶためのものではありません。古典ギリシア語で読むことが、翻訳とはどう違うかを感じていただき、その違いを楽しんでいただくためのワークです。

ギリシア語を学ぼうとしたとき、少なくとも東京周辺であれば、大学の講義以外にもいくつかの選択肢があります。詳しい、正確な文法事項は、そういったところで学んでいただければと思います。

2 今回の課題文

今回はホメーロスの『オデュッセイア』からとることにしました。(水谷智洋、『古典ギリシア語初歩』, 岩波書店の 19 課での練習問題に出て来て気が付いた、ということは知らなかったことにしてください)

モンダイの箇所は

.....ἐκ δ' ἄρα χειρὸς
φάσγανον ἦκε χαμᾶζε,

という部分です。

3 周辺を含んだ邦訳例

高津春繁による翻訳を見てみましょう。

こう言って、青銅の、双刃の太刀を抜き、恐ろしくおめきながら、オデュッセウスに飛びかかったが、その時尊いオデュッセウスが矢を放てば、胸の乳首のわきにあたり、早い矢は胆^{きも}につきささった。手から刀は床に落ち、かれは身を二つに折って机を蔽うように倒れ、馳走と両耳の杯とを床に散らし、苦悶して額で床を打ち、両足で大椅子を蹴り倒し、両の眼には死の霧が降りた。

太字の部分が、今回の課題文の箇所です。

4 課題文の検討

4.1 課題文の直訳

実はこの部分、直訳すると

すると彼は手から剣を床に向かって放った

くらいの意味になります。

4.2 各単語の検討

ἐκ 属格をとって「～の中から」という意味になります。ここでは χειρὸς にかかっています。

δ' δέという語なのですが、続く ἄρα が母音で始まっているので、母音が連続することを避けてこのような表記になっています。前の文章を受けて、その一方でくらいのニュアンスを表す語です。

ἄρα 「そうしたら」「ゆえに」くらいの意味の小辞です。

χειρὸς 腕や手、爪などを意味する女性名詞 χεῖρ の単数/属格。ここでは ἐκ と組み合わせられて「手の中から」となります。

φάσγανον 剣を意味する中性名詞 φάσγανον の単数。中性名詞は主格, 呼格, 対角が同じ形なのですが、ここでは対格と思われます。

ἤκε 放つという意味の動詞 ἵημι の三人称/単数/第二アオリスト/直説法/能動態。ギリシア語では動詞は人称によっても違う形をとるので、主語が書いてない文章の方がむしろ普通です。

χαμᾶζε 地面に、という意味の副詞。ギリシア語では副詞は変化をしません。

4.3 出来事の順序の再確認

もう一度、今回の課題文付近の状況を確認してみましょう。

1. エウリュマコス (ペーネロペーへの求婚者の一人) が剣をとって、オデュッセウスに向かって突進する。
2. オデュッセウスがエウリュマコスに向かって弓を射る。
3. オデュッセウスの放った矢がエウリュマコスにヒット、矢は (どちら側かは判らないが) 乳首の横に当たって (恐らくは) 腹部周辺の内臓に達する。
4. 矢が当たった反動で、エウリュマコスは体を二つ折りにするような形で後ろへと吹っ飛ばされる。
5. ことのき剣は彼の手を離れて床に落ちる (← 課題文の箇所)。
6. 吹っ飛ばされたエウリュマコスは後ろのテーブルに覆いかぶさるように落ち、テーブルの上にあったものをぶちまけながら絶命する。

つまり、この箇所はオデュッセウスの弓の威力を描写している部分なのです。

4.4 引用箇所までの背景

オデュッセウスがトロイア戦争に従軍して、永い、本当に永い年月が経過していました。妻であるペーネロペーは彼の帰りを待ち続けていましたが、オデュッセウスの財産を我が物にしようと何人もの求婚者たちが押しかけてきて、彼の財産を食いつぶしながら連日饗宴を催し、ある者は侍女と床を共にし、放縦のかぎりを尽くします。

ペーネロペーは機を織り、それが完成したときに新しい夫を選ぶと宣言します。そして昼は機を織り、夜にはそれを解いて時間を稼ぎます。そのことが求婚者たちに知られて、すぐに夫を選ぶように迫られたとき、彼女はオデュッセウスの使っていた弓に弓弦を張ることができた人を夫に選ぶ、と宣言します。

求婚者たちはこぞって弓に弓弦を張ろうと挑戦しますが、彼らの力では張ることができません。そんなとき、乞食の姿に身をやつしたオデュッセウスが帰還します。彼の正体を知らない求婚者たちは、余興のつもりで彼に弓弦を張るように促しますが、彼はあっさりと弓弦を張ってしまいます。

オデュッセウスによる復讐が始まります。求婚者たちのジェノサイドです。

まず、彼はアンティノオスが酒を飲もうとしているところを不意に射抜きます。このことに求婚者たちが驚き、彼を非難すると、彼は自らの正体を明かします。求婚者たちは恐怖におののき、エウリュマコスがすべてはアンティノオスの始めたことだと主張して和解を申し入れますが、それでオデュッセウスが納得するはずもありませんでした。

今や、殺されるのをただ待つのか、一縷の望みをかけてオデュッセウスに対峙するかしか選択肢がないことを悟ったエウリュマコスは、近くにあった剣を手に取り、オデュッセウスへと突進していくのでした。

4.5 そして、課題文に戻る

矢が当たったエウリュマコスの手を離れた剣は、床に向かって落ちたことでしょう。しかし、そこで使われている動詞は「放つ」というニュアンスのものでした。つまり剣は単にポロっと床に落ちたのでは、もちろんありません。

エウリュマコスは、恐らくは身をかがめながらオデュッセウスに突進していったのでしょう。胸に当たった矢は肺を貫いたのではなく胆にまで達した、といますから。そんな姿勢で突進してくる成人男性を大きく後ろに吹き飛ばすほど、オデュッセウスの弓は凄まじい威力を持っていました。

剣はエウリュマコスが突進してきたときの運動量を保ちながら、放物線を描いて床に落ちたことでしょう。彼は身をかがめていたでしょうから、床面に落ちるまでの距離はあまりなく、それは非常に短い時間であったはずで。

一方で彼自身は、矢に当たった反動で後ろに吹き飛ばされています。テーブルの上面は床よりも高い位置にありますから、その時間は剣が床に落ちるまでの時間よりも短かったことでしょう。そんな一瞬の間にエウリュマコスと剣の位置は大きく離れてしまいました。

その状況を第三者が見たら、まるでエウリュマコスが剣を放ったように見えたのではないのでしょうか。あなたなら、それをどう表現するのでしょうか。

5 おわりに

こうしたことを詳らかに見ていき、ニュアンスに違いがあるとわかったとき、どのように感じられたのでしょうか。

翻訳が悪かったのでしょうか。私には、そうは思えません。あの文脈の中で「彼は手の中から床に向かって剣を放った」と書かれたら、何のことかわからず読者は混乱してしまうことでしょう。

実は、私がテキストの練習問題でこの部分だけが抜き出された文を最初に見た時、「こうして彼は手から剣を床へと取り落とした」と訳してしまいました。「放つ」という動詞をこの部分単体で見た時、いかにも違和感を感じたのを覚えています。しかしそれは今まで見てきたように、あまりにも近視眼的な、浅はかな解釈でしかありません。

このように、翻訳には不特定多数の人に理解できるような表現をとる必要があります。元々書かれていた内容とはニュアンスが時として大きく異なる場合があります。そういった違いがあることに気づき、原文のニュアンスを伝え、原文が持つイメージを直接感じるキッカケを提供し、神話とギリシア語への興味を持っていただくことが、このワークの目指すところです。

今回取り上げた部分は、とても映画的な描写なのではないか、と個人的には思っています。あなたが映画監督なら、このシーンをどのように描写するのでしょうか。他の人とも、ぜひ話し合ってみてください。きっと、楽しいひと時になると思います。